令和４年度第１回北九州市子ども読書活動推進会議　会議録（要旨）

１　日　時　　令和４年１１月８日（火）１４：００～１５：３０

２　場　所　　北九州市立子ども図書館２階　大研修室

３　出席者
［委　員］　（敬称略）
山元　悦子、矢崎　美香、河井　律子、上満　佳子、本田　壽志、福江　國孝、仲　紀子、尾場瀬　淳美、内藤　稚代、山中　啓稔、鶴田　弥生　計１１名
［事務局］　教育委員会中央図書館長柴田憲志　他１２名

４　議事
（１）「北九州市子ども読書プラン（第４次北九州市子ども読書活動推進画）」の取組状況について

５　主な質疑応答
（委員）　子ども電子図書館のコンテンツ数約 2,000 点の有料無料の内訳は。電子図書館を閲覧してみたが、子どもの興味に応じて予約数が 0～40 と幅広いことがわかった。資料の中で閲覧回数上位コンテンツの出版社の欄に「青空文庫」とあるが、これは「配信先」とすべきではないか。
（事務局）　コンテンツはすべて有料である。２年間の期限や回数制限があるものもあり、紙媒体の書籍に比べると全体的に高額である。青空文庫は低額で使用制限はない。出版社欄の表記は確認をして適切に取り扱いをしたい。
（委員）　電子書籍の購入は民間資金の活用もされているようだが、恒常的ではないと思われる。継続できるように予算は確保されているのか。
（事務局）　予算の確保については内部で調整を図っているところである。
（委員）　一般書籍と電子書籍の予算の配分比はどうなっているのか。全国的に電子書籍の予算は増えているのか。北九州市はどうか。
（事務局）　本市では、電子書籍の予算は一般書籍とは別に確保できるよう検討中。電子書籍は、使用期限があるものもあり、継続していくためにはかなりの予算を必要とする。政令市は半数程度が電子図書館を導入しているが、全国的にはまだ広がっていないと思われる。

（委員）　「北九州市子ども読書プラン（以下「プラン」という）」は第４次が作られる際、前プランからどのような変遷があり、どういったところが特徴なのか。また策定時、すでにコロナの影響があったのか。その後の軌道修正は必要と考えているか。

（事務局）　第４次プラン（令和３年３月策定）では、子ども図書館の設置が一番の変化であり、子ども図書館が学校図書館・地区図書館と連携をとりながら、児童生徒の読書活動の充実を進めていくという点に大きな特徴がある。プラン策定時にはすでにコロナの影響を受けており、それを踏まえた内容となっている。

（事務局）　学校図書館職員については、現在６３名。中学校区に配置し、中学校と小学校・特別支援学校をまわっている。これにより学校図書館の読書センターとしての機能が強化され、読書時間の向上、不読率の改善、読書好きの子どもの増加等の成果があがってきた。

（委員）　学校図書館職員はいるが、コロナでブックヘルパーの活動が止まっているとも聞く。活動が再開できるよう各校に目配りをしてもらえないか。

（事務局）　すでにブックヘルパーが活動しているところもある。学校・地域・保護者の考え方によって違いがある。校長が学校図書館長であり、その指導のもと図書主任（教員）・学校図書館職員・ブックヘルパーが機能していくものと考える。

（委員）　地域学校協働活動推進員の研修会でブックヘルパーや保護者・地域の方の中から学校図書館に積極的に関わってくれる人を発掘してマッチングしてほしいと言われた。地区図書館員が学校での読み聞かせをしたくてもスケジュールが合わない、学校図書委員のおすすめ本の展示を地区図書館でしたくても運ぶ人手がない、などと聞く。何かいい手立てはないだろうか。

（委員）　子どもの読書活動推進の対象年齢は何歳か。どの年齢をターゲットにしているのか。優先順位はあるか。

（委員）　国際子ども図書館では、対象年齢は０～１８歳と示されている。ある年齢を重点的な取組対象にすることは、不公平が生じることになるためできない。

（委員）　学校図書館で地域・保護者のボランティアがどのような活動をしているかを子ども図書館が把握して地区図書館につないではどうか。小学校でブックトークを１０年以上している。一人読みができないと問題になっているが、子どもに本を手渡す方法としてブックトークがあ

るので、養成講座をするなどして広めてもらいたい。予算面もあると思うが、学校図書館職員の全校配置をお願いしたい。

（委員） 新設された児童サービス担当者会議の内容と今後の進め方を教えてほしい。

（事務局） 学校図書館と地区図書館の連携、学校からの問い合わせや協力依頼への対応等を協議している。読書ボランティアの活動状況については、コロナの影響で活動休止の団体もあるので、各地区図書館に現状把握を依頼して、子ども図書館で集約し整理しているところである。学校図書館の状況については、授業づくり支援企画課と連携して把握に努めたい。

（委員） ブックヘルパー、読み聞かせボランティアなど、地区・学校図書館で活動している方がたくさんいる。自分の団体も 30 年以上活動し、司書の行う児童サービスについて、ほとんどのものはできる。有能な人材をかかえている団体があるので、要望する方に要望するサービスを提供できるよう子ども図書館が中心となってデータの整理をされてはいかがか。地区図書館が地域で一番適した人材を学校に派遣できるようになればといいと思う。ブックヘルパーが本の整理の他に展示の手伝いができないか等検討し、活動の幅を広げられるといい。また、著名な作家が亡くなられた際、その作家の展示コーナーを設置してもらいたい。

（委員） ボランティアのデータの整理はホームページ上などで活動をする方に登録していただき、情報共有し、常に更新できるものにするとよいのではないか。九州女子大学では折尾分館・八幡・八幡西図書館とコラボしてイベントを実施しており、遊びながら壁を使って自分たちで作ろう１ページという企画や、大型絵本を使った読み聞かせなどが喜ばれた。今後も地域と連携して活動していきたい。当大学は司書になりたい学生が多数いるので、お手伝いが必要な際はお声かけいただきたい。学生達の貴重な経験の場ともなる。

（委員） 読書の秋・本を持って集まろうというイベントをした。自分の持ってきた本を紹介したり読み聞かせをしたりする自由なスタイル。誰でも気軽に参加できる催しで楽しくて良かった。このような企画もあるとよいのでは。

（委員） 資料の説明の際の「読書」には電子図書も含まれ、読み聞かせやブックトークは紙の書籍を想定していると捉えた。「読書活動の推進」は紙・電子どちらを想定しているのか。情報集約がなかなか進まない理由は何なのか。

（事務局）　「読書活動の推進」の言葉の定義には紙も電子書籍も含んでおり、それぞれの可能性を生かしながら進めていきたいと考えている。情報集約については、現在アナログで行っており、マンパワーや専門スキル不足に加え、学校や地域の状況の違いもあり、なかなか難しいところがある。今後はデジタル化も視野に入れて検討していきたい。

（委員）　前回の会議は書面会議で、分かりにくい部分もあった。今回は学校や図書館の状況も聞け、現場の問題に対するマッチングもできたので、対面で会議を行う意味はあったと思う。